吉藏撰『仁王経疏』における問題

栗谷良道

吉藏撰『仁王経疏』における問題

ところで吉藏の他著書『法華玄論』巻第三にも三種教相の記述があり、さらに菩薩流支の半據義にあたる『即知半據義本』大正三一・三八四下と述べて菩薩流支を指摘している。ことに『仁王経疏』巻第四・三八四下と述べて半據義を指摘している。すなわち巻第一と巻第八のニヶ所であり、前者は『法華義疏』巻第一、後者は『法華義疏』巻第三、『中觀論疏』巻第五に相当箇所を見いだすことができる。さらに『法華義疏』巻第一、後者は『法華義疏』巻第三、『中觀論疏』巻第五に相当箇所を見いだすことができ、このように吉蔵は自らの著書において『法華義疏』と呼ばれる伝統を指摘している。この問題については平井俊栄先生に相談したが、五部別々の引用が含まれていない著書からの引用であるかは不明である。このように吉蔵は自らの著書において『法華義疏』と呼ばれる伝統を指摘している。この問題については平井俊栄先生に相談したが、五部別々の引用が含まれていない著書からの引用であるかは不明である。このように吉蔵は自らの著書において『法華義疏』と呼ばれる伝統を指摘している。この問題については平井俊栄先生に相談したが、五部別々の引用が含まれていない著書からの引用であるかは不明である。
仏相好為実報身も（大正三八・三三六七）とあり、実報の典拠を

吉蔵撰『仁王経疏』における問題（東谷）

次に実報についてであるが、吉蔵撰『仏為経』に

吉蔵撰『仁王経疏』において問題（東谷）